文化庁『地域文化芸術振興プラン』「ミルコトカラハジマル　－自然との対話－」開催報告

田代亜矢子　石﨑三佳子　中山公子　杉山はるか

1　はじめに

文化庁『地域文化芸術振興プラン』は、都道府県が企画する地域の芸術家や芸術文化団体、伝統文化保存団体等を活用した取組みを支援し、特色ある地域文化の振興など地域の「文化力」の向上とともに、文化芸術活動の活発化により地域経済の活性化を促すことを目的として文化庁が実施する単年度補正予算事業である。

愛媛県では、県民総合文化祭をプラン事業の中核事業と位置づけ、文化祭実行委員会をプラン実行委員会とした。予算は、県事業と市町事業それぞれに配分し、美術館では「ミルコトカラハジマル」と「みづゑのきらめき」の二つの展覧会に予算が配分された。

本稿は、県内外で活躍する愛媛県ゆかりの作家を取り上げた「ミルコトカラハジマル」の展示及び関連イベントの開催を報告するものである。

2　概要

本展では、自然との対話をキーワードに県内外で活躍する愛媛県ゆかりの８作家を取り上げ、作家それぞれの自然との関係を示すことを試みた。

また、それぞれの作家が自然との対話によって制作した作品を通し、鑑賞者と作家を繋げ、鑑賞者が身の回りの自然や日常を見つめなおすきっかけになることを目的とした。

県内外で活動をしている愛媛県ゆかりの作家を調査し、その中から本展の趣旨に合う創作活動をしている作家 8 名を選出した。作家本人に直接交渉をしたり、取り扱い画廊と交渉を重ねて、出品作家は五十音順で次のとおりとなった。

石山直司（銅版画）、上田勇一（シルバーポイント）、香川久士（写真）、近藤英樹（リトグラフ）、真鍋武（平面・立体）、三野計（紙版画）、村上保（乾漆）、山本修司（平面・立体）

会期中、8 名すべての作家にワークショップなどイベントを行ってもらった。詳細については、各作家の項目で記すこととする。

あわせて、作品のモチーフ、制作の過程で生じる素材の一部、作家の思考や制作の痕跡がうかがえるもの、作家や作品を表すものを「アートのタネ」と称して、毎日先着 25 名の入場者にプレゼントした。作家や作品と鑑賞者とを結び、生活や社会にアートを広げるツールとなることを目指した。

以下、それぞれの作家及び作品について紹介し、会期中に行ったイベント、アートのタネについてまとめてみたい。

3　各作家について

（1）石山　直司

1965 年愛媛県新居浜市に生まれる。現在フィンランド在住、フィンランド版画家協会会員。1992 年に愛知県立芸術大学美術研修科を修了し、国内外の公募展等で銅版画の作品を発表。2003 年に文化庁派遣芸術家在外研修員としてフィンランドのユヴァスキュラ美術館のユヴァスキュラ版画センターでノン・トクシック技法を中心に版画の研究、制作を進めた。研修先のユヴァスキュラは、国際的な版画の公募展を開催し、国内外の版画作家を受入れられる滞在型の版画工房であるユヴァスキュラ版画センターを設置するなど、版画の町を目指す。フィンランドの風土や美術に加え、そういう町の環境が石山の肌に合い、研修終了後もフィンランドに拠点を置き、ユヴァスキュラ版画センターに勤務しながら、制作、発表を行う。

日本での作品は、記憶の中の遺跡、人間や都市、メカニックな形態などを複雑に構成し、緻密な描写を特徴とする。フィンランドでの制作以降は、シンプルな表現へと変化しながらも、より本質に迫ることを追求する。

本展では、フィンランドでの銅版画作品と最新のドローイング作品を出品した。銅版画は、黒インクの上に白インクを重ねて刷り、色を弱め、そこから現れる物質の存在、印象を重視している。ドローイングの作品は、自分の記憶にある形を描き起こし、目の形をした池、人の頭の形をした岩山、シロツメクサの形をした塔の頭頂部、

というように描く対象を通して、似た形でありながら全く違う大きさの対象を想定した、見立てによる作品である。自分の見たいもの、興味あるものを描く石山は、一貫して頭の中に既にあるイメージを形にしていく過程で引き出された新たに見えてくるもの、新たなイメージを表現する。

本展のテーマ「自然との対話」に対し、石山の銅版画では直接的な自然の表現はないが、薄れゆく表現、澄んだ空気感、静寂さというのは、全く気候、風土の違う国である、フィンランドの環境が、石山の感覚に刺激を与えたことは否めない。ドローイングの作品においては、自然の造形を通して別の対象をイメージしたり、反対に対象を通して自然の造形をイメージしたり、自然を形のイメージで捉える石山ならではの自然との関わり方がうかがえる作品であると言えよう。

会期中、現在、関心を寄せている版表現であるポリエステルフィルムを版材としたリトグラフのワークショップを実施した。日常で使用する油性のマジックやボールペンで描いたものがそのまま版となり、紙に刷ることができるこの版材は、直接的なドローイングの表現と版画の展開力を持ち合わせており、石山自身、自作への応用の可能性を実感する。ワークショップを通して参加者は、

石山と版画との関係性、作家の新たな試みを共有することのできる貴重な機会を得た。石山にとって、この技法は実験段階で、このワークショップで参加者にもいろいろ試してもらい、新たな情報を得る場となることを願った。その意図は参加者にも理解され、参加者自ら石山が試していない方法を試す場面も見られた。

「アートのタネ」は、新聞、雑誌の切れ端に植物が描かれたものをカプセルに収めたもの。そのアートのタネの育て方（楽しみ方）として、石山からのメッセージは「ドローイングはわかった形を描くものではなく、そこから形を探すために作るものだと思っています。今回アートの種として提供するのは、今、私が興味を持って取り組んでいる植物の構造を知るためのドローイングです。」

（2）上田　勇一

1974年東京に生まれる。現在愛媛県松山市在住。ルネサンス期から使用されている素描道具であるシルバーポイント（銀筆）やテンペラなど古典技法による細密表現で評価を得る。

極細の線の積み重ねで画面を構築していく上田は、「無数の線の蓄積は自分の生命である」と言う。どんなささやかなものにも美しさを感じ、感動する、その想いを何百年も受け継がれてきた技法を用いて写し出す。上田の創作活動は、まさに自然と歴史との対話によって生み出されていると言える。

高校時代に建築科で図面を引く訓練を重ね、日本工業大学工学部建築学科に入学する。類まれな集中力と器用さで次々と製図のコンペなどで受賞を重ねた。

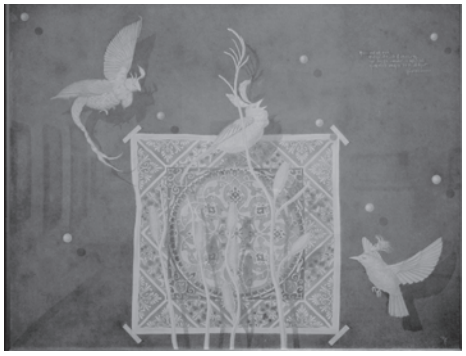
在学中にギャラリーをめぐって、数少ないシルバーポイントの画家・高橋勉の作品に出会う。自ら高橋勉に連絡を取り、弟子入りを志願。繰り返し志願することで、指導を受けることができるようになる。

シルバーポイントの技法は、まず下地作りから始まる。白亜と膠を練り合わせたものを板または紙に塗り、塗っては磨き、塗っては磨きという作業を20回程度繰り返すことで、白く輝く均一な下地が出来上がる。その美しい下地に、銀の先端をやすりで極細く削ったものを用いて、

ハッチングと呼ばれる描法で描く。極細い線を細かくクロスさせてグラデーションを作り、その積み重ねによって細密な表現を生み出す。ハイライトの部分を描かずに残し、鉛筆とも違うシルバーポイントのメタリックな線を積み重ね、背景から地道に埋めていく。暗い部分を描きこんでいくことで、地の白を光源とした内側から輝くような深い作品が生まれる。時間の経過と共に、銀の酸化によってセピア色に変色するのも魅力の一つである。

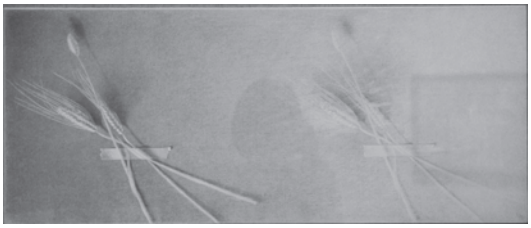
下絵としてではなく、シルバーポイントだけで制作する作家は稀有で、面ではなく、均一な線の積み重ねで描くことは、膨大な時間を要し、高度な技術が必要である。しかし上田自身は、すでに身についていた製図の技術とシルバーポイントの技法がぴったりと合致し、さらに緻密な作業をひたすら積み重ねる制作に自分の性格が合っていたと言う。その技によって、透明感、空気感までも表現できる作品の力は見事なものである。

初期の作品は、画面の隅々まで持てる技術を100%ぶつけた力作がそろう。例えば《楽想》(2003年作、シルバーポイント/板）は、91.0×116.7㎝の大画面で、前述



の技法を思い起こせば、膨大な時間と集中力が必要であることは容易に想像できる。実際、この作品の制作には1年半から2年程度かかったと言う。

目を見張るほどの細密な表現で評価を高めた上田は、次第に観るものが作品の中に惹きこまれ、そこでそれぞれのストーリーが生まれるような深みのある作品作りへ



と向かっている。《ドライフラワー》(2008年、シルバーポイント/板）は、その一つであり、技術的にもさらに精度が上がり、非常に完成度の高い作品となっている。

会期中、アーティストトーク「シルバーポイントの魅力」を2回開催した。各回50名前後の参加者を数え、学芸員との対話形式で、上田作品の魅力の秘密を紐解いていくようなトークとなった。

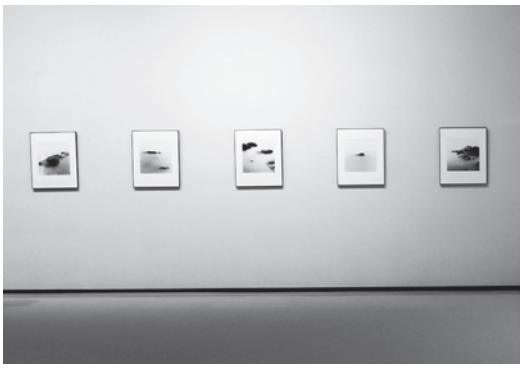
「アートのタネ」は上田の作品に登場するドライフラワーなど。そこに添えられた作家の言葉は「日々の生活の中で、様々の物がアトリエに集まります。その、愛しいもの達は私を支えてくれています。絵に登場してくれた、発想のタネをどうぞ。」

（3）香川　久士

1971 年愛知県に生まれる。現在愛媛県松山市在住。1993年北海道大学水産学部を卒業し、その後あいテレビ（愛媛）、また放送技術社（新潟テレビ 21）の制作カメラマンとして働き、1997年に渡欧。イタリアで写真技術を基礎から学び直した。イギリスではブロムオイル印画法という写真の古典技法に出会い、これを習得する。2001年に帰国するが、国内だけでなくイギリスやフランス、アメリカなどでも個展やグループ展で作品を発表している。ブロムオイル印画法によるワークショップなども各地で行っているが、近年ではより写真の特徴が表現できる、ゼラチンシルバープリントに移行している。

今回の出品作はブロムオイル印画法による作品と、ゼラチンシルバープリントによる連作《Rock》。後者はそのタイトルに示されている通り、近海にごく身近に見られる岩をモチーフに制作している。もちろん同じ岩はなく、ひとつひとつその形や岩肌、距離、影の様子などは異なっており、一見海水に浮かぶ岩なのか、雲間に浮かぶ岩山なのか戸惑いながらも、ゼラチンシルバープリント独特の質感を伴い神秘的な風景を形成している。こうした連作では、作品1点ずつを近くで眺めるというよりも、全体の光景を引いてみることにより見えてくる抽象的な形を提示している。日常にあふれているいろいろな風景の中にある、ひとつひとつの存在を作家が切り取ることにより、改めて私たちにその意味を考えさせてくれる。

一方でブロムオイル印画法とは、最終工程でインクを直接作品に載せるという、極めて特殊な技法である。20世紀初頭に見出され、以後欧米や日本においても導入さ



れた。像を焼き付けた印画紙の白黒の画面は銀を含むゼラチンで出来ており、このゼラチンを硬化させる溶液につけると、銀の含み具合によって表面に凹凸ができる。これを水に浸した後、油性のインクを載せると水と油の反発作用によって、元の図像の暗い部分にインクが多く載っていくのである。

本展の会期中、あまり知られていないこのブロムオイル印画法を実際に一般の方にも見ていただくために、公開制作を開催した。実際に写真に興味を持って制作をしている方も多く集まり、細かな技法の特徴についての詳しい話しが飛び交った。

「アートのタネ」は作家が撮りためた写真の試し焼。作家の視線が向けられた風景が、ひとりひとりに配られた。添えられた言葉は、「一つの作品を作り上げるため、試行錯誤を繰り返しながら自分の思い描くイメージに近づけていく。それは色々な事に言えるでしょう。

写真において作品作りの足がかりとなるものは、ネガのコンタクトシートであり、テストピースといえます。一つの作品を作り上げるためには、多くのテストピースが必要となります。今回、それらを「アートのタネ」に選んだのは、どのような事も成功するまで挑戦し続けること、その工程を大切にすることを感じてもらいたいからです。」

（４）近藤　英樹

1977年愛媛県久万高原町に生まれる。現在神奈川県在住。武蔵野美術大学大学院美術専攻版画コースを卒業。在学中の1999年「全国大学版画展」にて買い上げ賞を受賞し、町田市立国際版画美術館に収蔵されている。卒業の翌年、2003年よりハーグ王立美術アカデミーに研修生として１年間留学。日本国内はもとより、オランダでも個展、グループ展を重ねる。当初より、植物の形態を優しい色の重なりによるリトグラフで表現している。特に、植物の芽吹きに着目した作品が多く、今回も blooming（芽吹き）、再生の種、ホウシと題した作品が出展されている。松山市内のギャラリーにおいて近年毎年個展を開催するなど、愛媛においても馴染みのある作家である。

2009年、近藤が実行委員長を務めた銅版画家・井出創太郎の展覧会「渡部家住宅その光と記憶」の第三期において、木彫に着色した立体作品を発表。つくばいの水の中に浮かべたり、軒先の植物に添えて展示したりとさりげない展示方法が取られ、リトグラフに通じる優しい色彩の木彫は好評であった。今回もリトグラフ作品と併せ

て展示している。

市内での個展を 10 月に開催した後、本展に向けてリトグラフの大作 2 点を制作。大中小の３タイプのリトグラフ作品計 14 点を展示することとなった。版画作品は額に入れず、3 センチ厚のスタイロフォームに貼り、浮き展示を行なった。また、立体作品を展示中央に設置。他にも展示室入り口、渡り通路の天井、扉の陰など館内 14 箇所にそっと展示した。エレベーターを降りて直ぐの長椅子付近にもクワイのような木彫作品が 17 個設置され、来館者の目を楽しませていた。

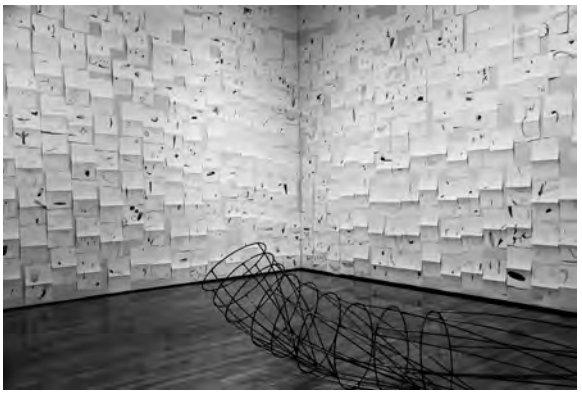
会期中の 2 月 6 日には、近藤の制作の中心であるリトグラフの公開制作を行なった。2005 年、当館においてリトグラフの実技講座を既に開催したことがあったため、今回は、石版石によるリトグラフの公開制作をアトリエ１において行なった。石版石は、近藤が現在講師を勤める横浜美術館より借用した。午前中に準備作業として石の研ぎ出しを行い、午後 1 時より工程の説明を行いながら、見学者にも描画に参加を促し、来館者が持参していた口紅でも試すこととなった。製版、刷りの工程を 3 時間という短時間で実施。最後には、刷りの体験を見学者に呼びかけ、小学生二人にも刷り作業を体験してもらった。石版石は、現在では、高価な上に取り扱いは重たく、決して作業しやすいものではないが、短時間の制作にも関わらず、4 枚, 5 枚と刷っていくと、細かな描画まで刷りとることができ、石版石の特性を実感することができた。

「アートのタネ」では、リトグラフ作品と木彫作品の両方の制作過程から生まれた、版画作品の色見本３枚、木端３片が入れられた。それに添えられた言葉としては、「リトグラフを制作する際に色を決めるテスト用紙と木彫を制作するときにできる木片です。色とフォルムが語るもの。どちらも制作過程の断片に過ぎませんがこれらの間で思考します。」

（5）真鍋　武

1954 年愛媛県西条市に生まれる。現在茨城県在住。武蔵野美術大学造形学部美術科油絵専攻卒業、絵の具会社に就職するも作家として立てていくことを決意し、退社。フランスを 1 年程訪れ、帰国後茨城に定住する。

どう表現するかではなく、何を表現するべきかというテーマを模索しながら制作を行なっている。現在は、「生成／時間／移行／連鎖」をテーマに表現している。1999 年のギャルリーワッツ（東京）の個展において、無意識下において成り立つ形を求めて 1000 枚のドローイングを自身に課した。その描きためていたドローイングを床一面に貼った展示を行っている。その後、ドローイングと立体を連動させた展示を展開している。本展でも、コの字の壁面に 2007 年から 2010 年に日々描いた 772 枚のドローイングを貼りめぐらした。無意識に描いたそれらのラインは、シンプルながら植物を連想させ、生命の根源的な「かたち」としてイメージ付けられている。その



中央には、大きな鉄製の立体を設置、手前の壁には同様の小さな鉄作品を展示した。ファイルフォルダーに描かれたドローイングは、描画された線が所どころ繋がりながら展示されており、巨大な一枚の絵画として成立している。また、ドローイングに用いているファイルフォルダーの折れが微妙な陰影をかもし出し、黄味がかった温かな会場ができあがった。

また、会場外の展望ロビーには、創作のモチーフともなる枯れ植物をガラス面に貼り付け、来館者の関心を惹いた。

会期中、「アートで確認《私と自然の関係》―二つの自然を大切に―」と題し、終日にわたるワークショップを実施。まず、アトリエにおいて、落ち葉を一回り大きくデッサンしたり、一筆書きで描いてみたり、中央から広がるように描いたりと作画を試みる。また、手元を隠して描いたり、モチーフを手探りによってのみ描いたりすることで、「描く」ということを考えさせ、これまでの固定観念が揺さぶられるような感覚を受講者は味わった。描くことを意識・無意識化することの難しさ。「自然」に制作することの難しさを体感。その後城山に行き、枯れ植物の採取を行い、アトリエで自然界において美しいと感じる形をナイロン袋に切り取った。真鍋の制作時の思考を追体験するようなワークショップとなった。

「アートのタネ」は、展望ロビー、特別展示室への通路などのガラスにも展示した枯れ植物を充てた。添えられた言葉は、以下の通りである。

「[枯れ植物]を好きな空間に貼って下さい。
私達の身近な場所にも、たくさんの偉大なアーティストが‘密か’に息づいています。この[枯れ植物]もその一人。透明なビニールに入った名もない[芸術家]は、無限のインスピレーションを生み出す、あなたの熱い視線を待っています。」

（６）三野　計

1949 年愛媛県西予市野村町生まれ。現在松山市在住。1968 年多摩美術大学油絵科入学。大学卒業後のインド旅行を機に油彩画から離れ、紙版画をはじめる。地元野村町の手漉き和紙を利用して、手探りでできる版画として、紙版画の独自の手法を次々と編み出していく。

1975 年には松山市に美術研究所「アトリエ　IGANDA」を開設する。「人の彷徨いのかたち」をテーマにモノトーンの作品を制作し、地元を中心に発表。時の流れとそれに伴う環境や人の心の変化を意識した制作を続ける。

最近では、膨大な数の小さな人型を張り重ね、一つずつ人型を剥がしていくことで、異なった光景が現れるという作家と鑑賞者の協働作品を発表する。これは、水張りした人型を剥がす感覚と、剥がすことで作品が変化していくという視覚的な効果で、鑑賞者の心に深く刻まれる作品となる。さらに自然環境の変化をテーマに、地球儀やボーリングのピンなどに人型を張り重ね、複数並べて表現する作品を発表し、次第に鮮やかな色彩の作品へと移行する。

三野の作品は、常に人と自然との関わりがテーマとなっている。今回の展覧会でも自然をテーマに毎週展示を変化させ、モノトーンの作品と強烈な色彩の作品を組み合わせた５種類のインスタレーションを見せた。

鑑賞者にも展示替え作業に加わってもらい、展示が変化するその瞬間に立ち会う体験をしてもらった。

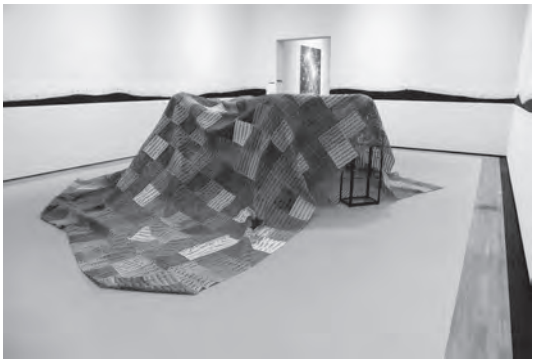
■ブルータス　お前もか！　―移変―

１月 22 日（金）～1 月 28 日（木）

■浄化　　1 月 29 日（金）～2 月 4 日（木）

■保護　　2 月 5 日（金）～2 月 11 日（木）

■逆流　　2 月 12 日（金）～2 月 18 日（木）



■虹がかかる　　2 月 19 日（金）～2 月 28 日（日）

ワークショップ「なすびをデザインしよう」では、本物のなすを型取りした石膏のなすを用意し、参加者に自由に色付けしてもらった。「自由に」と言われたとき、それぞれの個性が現れる。へたをへたとして塗る人、その概念から脱却している人、またなすの模様として色付けする人、風景や動植物を描く人など、興味深い仕上がりとなった。新館のエントランスホールに参加者自身で飾ってもらい、会期末まで展示した。

「アートのタネ」は作品に繰り返し出現する人型を切り抜いた小さな紙片。「これは、緑の種をまく人です。この種は、人の輪（つながり）を広げる種です。自然の素晴らしさを共に感じあえる人々との出会いを導くお守りにもなります。貴方が身に着け、一緒に持ち歩くことで自然を、地球を大切にしたいと強く意識されることを望みます。」という作家の言葉が添えられた。

（7）村上　保

1950 年愛媛県大洲市に生まれる。現在東京都在住。1974 年東京学芸大学卒業。1974 年から現在に至るまでモダンアート展に出品し、74 年には新人賞、76 年には協会賞、部門賞を受賞し、78 年には会員となる。2000 年には文化庁派遣芸術家在外研修員として、イギリスのテート・ブリテン、テート・モダン・ミュージアムで研修を行う。2003 年には、佐倉市美術館で開催した展覧会「カオスモス'03 “マインド・スケープ”」で取り上げられる。本展は愛媛で初めての彫刻作品の展示となった。

1980 年頃までは木彫を中心とした制作を行う。制作意図の変化とともに表面の木目を邪魔に感じることが多くなり、大型の作品も可能にする乾漆を思い付く。そこには「重量感のあるものが彫刻」という概念を否定し、量感の無さや脆さみたいなものを形態にしたいという思いもあった。村上の乾漆は、仏像に用いられる乾漆技法を基にしながら、ベニヤや発泡スチロールなどで作った原型の上に布、カシュー塗料を交互に繰り返し何層も重ねる独自の技法で、制作する。さらに、乾漆に似た構造が得られ、軽量化が図られる段ボールを用いた巨大な作品も試みている。

村上のモチーフは、乾漆での制作以前から蝸牛、兜、獅子頭など無意識のうちに空洞を内包したものであった。村上の空洞のモチーフは乾漆と通じ、新たに柩、風船と

展開し、現在の羽化のシリーズに至り、空っぽの空間、羽と胴体の隙間など、実在しない形に“かたち”を与え、その空洞へ鑑賞者を誘い、個々の想像を喚起させる制作を続ける。乾漆は実質的な軽さだけでなく、その素材の特質が軽やかなフォルムと柔らかな表情を引き出し、村上らしいユニークな形態へと結びついた。

本展では、乾漆の作品の変遷が辿れる構成となり、村上の制作意図が読み取れる展示となった。《脚（あし）付きの柩Ⅲ》は、乾漆を始めた頃の作品であり、４本脚の箱（柩）に線や穴による模様が刻まれ、木彫でも見られた村上の民俗学への関心をうかがわせる作品である。《風を聴く装置―ＢＯＸ―》は、柩の箱を思わせる形態を引き継ぎながら、オカリナをイメージした作品である。その後の軽やかな曲線が繰り返される風船シリーズから《風の船Ⅳ》。そして、現在進行中の蝉の羽化や抜け殻から着想を得た羽化シリーズの作品３点。このシリーズでは、地面に降りたった蛾の羽との隙間（空間）に形を与えることに加え、羽化の神聖な時間をも意識し、村上の日常での自然へのまなざしをうかがうことができる。

会期中には「シリーズ作品「羽化」とそれ以前」という主題で、アーティストトークを行い、自作の変遷について語った。普段聞けない制作者の本音も聞くこともでき、作家に親しみを憶える場面が随所に見られた。

「アートのタネ」は、木片と鉄片。木片はチーク材で、木彫の制作で木を刳り貫く際、生じたもの。ドリルで穴をあけ鑿をいれていくため、蜂の巣のように穴があいている。鉄片は鉄の作品を制作する際の鉄の切れ端で、様々な形、色のものが用意された。その「アートのタネ」の育て方（楽しみ方）として、村上からのメッセージは「彫刻作品の制作過程では沢山の木端や破片が出ますが、その中には棄てがたい魅力のある形をしたものが少なくありません。たとえば動物を連想したり、風景をイメージさせられたりします。その破片に穴を空けたり、削ったり、着色したり、ちょっとだけ手を加えることで、そのイメージはより具体的になって、小さな新しい作品として再生する可能性を秘めています。」

（８）山本　修司

1959 年愛媛県松山市生まれ。現在兵庫県在住。1982 年大阪芸術大学美術学部卒業。大学在学中より関西を中心に絵画や立体の制作、発表を続ける。

1980 年代前半には幾何学模様のような、規則的な線を連続して引いた作品を多く制作していた。当初制作に向かった動機は、私たちが生きている世界、つまり宇宙の始まりに強い関心を覚えたことだと言う。そのときの光景はどのようなものであったか、それを自分の中で繰り返し再現してみたいという強い欲求とともに制作を続けている。1990 年代半ば頃より自身の手で描く線ではなく、枝の広がりや石をガラスの上に落として生まれるひび割れなどの、自然の中に見出される形を表現し始める。

本展では、現在作家が制作を手がける代表的な３つの

シリーズの中から紹介した。エアスプレーによる「木漏れ日」（上図）、プリンターのトナーを用いた「ちりよる」（下図左）、そして小石を敷き詰めた「ランドスケープ」（下図右）である。「木漏れ日」は、木々が枝を広げ、その合間から太陽の光が降り注ぐ様子を大きな画面に表した作品である。まるでソフトフォーカスの写真のように光の丸い粒が画面いっぱいに広がる。ここで描かれる木は実際のものではなく、作家の内側にイメージとして広がる枝の形である。「ちりよる」は葉や金木犀の花びらを、予め彩色した支持体の上に散りばめ、その上からトナーを振りかけてその形を写し取った作品。作家の身近にある植物を採取し、それらが重なり合って偶然できあがる輪郭を独創的な技法によって刻印する。一方で「ランドスケープ」は、河原や湖のほとりなどで作家が拾い集めた小石を、小さいものから大きいものまで緻密に並べて一つの風景を完成させている。これは自然物を作家が一つ一つ選び、それをある一定の規律に基づいて配置した作品である。

作家は木、石などの身の回りにあるものに着目し、それらが生み出す形態を独自の手法で写し取ることを淡々と継続している。

会期中には、アーティスト・トークを開催。過去から現在に至るまでの、作家の制作に向かう真摯な姿勢を、話の内容からうかがい知ることができた。

「アートのタネ」は、「ランドスケープ」に因み、小石。一つ一つ形の異なる石に丁寧に台座をつけてそのまま飾れるようにし、箱に詰めた。メッセージは、「どこにでもありそうなもの、自然のものはそこにある必然性を、感じるものに与えてくれます。人工的なものもその一部です。河原に落ちている空き缶やビンのかけらも同じ。だけど・・・・・・・人は、旅したときの記念にそこにあった小石を持ち帰ったりします。どこにでもありそうな物が思い出によってかけがえのないものになる。大切なものは、人（心）の中で生まれている。」

４　おわりに

今回の展覧会は、かねてから愛媛県出身やゆかりの若手作家の作品について調査し、優れた作品を顕彰していこうという当館の方針が、文化庁の予算が美術館事業に配分されたことによって実現したものである。

最も苦労したのがテーマ設定である。複数の作家を選定でき、かつ作品の魅力を最大限に引き出すテーマでなければならない。また、鑑賞者と作家や作品とを結び付けやすいテーマであることも必要である。愛媛県出身もしくはゆかりの若手作家は数多く存在し、その中から一部の作家を選定するということは非常に難しく、また展覧会を開くことは歴史を刻むことでもあり、重責である。

その上で設定したテーマ「自然との対話」は、今回選定した８人の作家が日々取り組んでいる創作活動に密接に関わる問題であり、近年制作した作品の中に、出品候補となりうる作品を見出すことができた。さらにこの展覧会のために新たに制作した作品も展示された。

８人８様の「自然との対話」を紹介することができ、その作品や鑑賞者にプレゼントされた「アートのタネ」を通して、鑑賞者が身の回りの自然や日常を見つめなおしたり、鑑賞者自身の「自然との対話」を生み出すきっかけとなったのではないだろうか。

また、鑑賞者の中には今回の出品作家について初めて知った人が少なからずいたと考えられる。作家について知っていたとしても、この展覧会のために制作した作品を出品した作家もいるので、新作紹介の場にもなった。

愛媛県出身もしくはゆかりの作家を少しでも県民に向けて紹介し、そして多くの県民がその作家たちを応援する機運を高めることは、地域の美術館としての重要な役割と言えるだろう。本展がその役割の一端を担ったことは、大きな成果だったのではないだろうか。

今後も継続的にこうした展示活動を通して、美術館が作家と鑑賞者をつなぐ場となることを願って、本稿を閉じることとしたい。

展覧会データ

1.　展覧会名
文化庁『地域文化芸術振興プラン』
ミルコトカラハジマル　ー自然との対話ー

2.　会期（33日間）
平成22年1月22日（金）～2月28日（日）
休館日：1月25日（月）、2月2日（火）、2月8日（月）、2月15日（月）、2月22日（月）

3.　入場料　　無料

4.　入場者数　　3,774人

5.　ワークショップ

講師	ワークショップ名	日時	参加数
石山直司	描いたものが版になる!?かんたんリトグラフ	①2／27（土） 10：00～17：00 ②2／28（日） 13：00～16：00	①　14 ②　19
上田勇一	アーティスト・トーク　―シルバーポイントの魅力―	①1／30（土） 14：00～15：00 ②2／7（日） 14：00～15：00	①　43 ②　55
香川久士	公開制作「インクを使った写真技法―ブロムオイル」	2／11（木・祝） 11：00～12：00 13：30～14：30	16
近藤英樹	公開制作「リトグラフ―石に描こう―」	2／6（土） 13：00～16：00	59
真鍋　武	アートで確認《私と自然の関係》―二つの自然を大切に―	1／24（日） 10：00～15：30	18
三野　計	「なすび」をデザインしよう	2／14（日） 14：00～16：00	34
村上　保	アーティスト・トーク　―シリーズ作品《羽化》とそれ以前―	①　1/22(金) 14：00～14：45 ②　1／23（土） 10：30～11：15	①　32 ②　31
山本修司	アーティスト・トーク　―自然、今、私―	①　1／22（金） 14：45～15：30 ②　1／23（土） 11：15～12：00	①　32 ②　22
		合計	499人

6.　フロアレクチャー
日時：2月13日（土）14：00～15：00
参加人数：3人

7.　ガイドボランティアによる対話型トーク
日時:1月30日(土)、2月6日(土)、2月13日(土)、2月20日（土）　各10：30～11：30
参加人数：延124人

8.　会場
愛媛県美術館2階　特別展示室1・2・3、常設展示室3

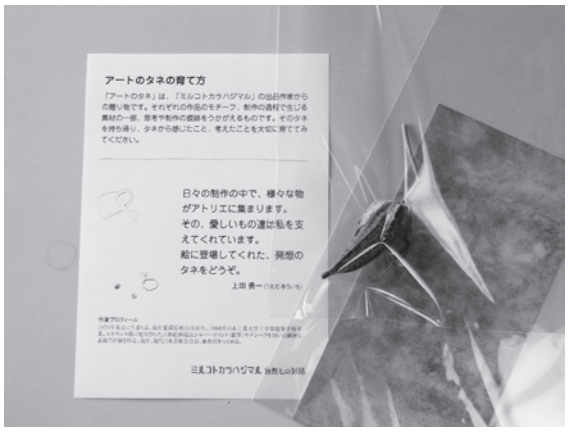
9.　主催
文化庁　愛媛県　愛媛県教育委員会　県内市町　県内市町教育委員会　(財)愛媛県文化振興財団　愛媛県文化協会　愛媛県県民総合文化祭実行委員会

10.　後援
愛媛新聞社　朝日新聞松山総局　毎日新聞松山支局　読売新聞大阪本社　日本経済新聞松山支局　産経新聞松山支局　NHK松山放送局　南海放送　テレビ愛媛　あいテレビ　愛媛朝日テレビ　エフエム愛媛

アートのタネ

石山　直司

真鍋　武

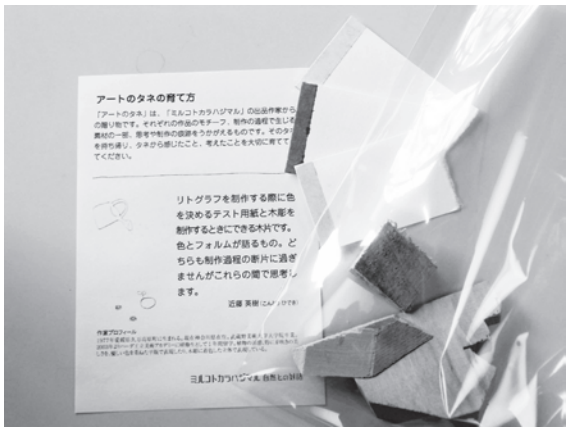


上田　勇一

三野　計

香川　久士

村上　保



近藤　英樹

山本　修司

作家の言葉

■石山　直司
たとえば直径 10 メートルのしろつめくさと同じような形をした物体があったとしたら、人はそこにしろつめくさに似た巨大な物体を見るのではなく、その物体を通してしろつめくさそのものを感じるのではないだろうか。また、色を弱めていくことで逆に明確に見えてくる印象としての形というものがあるのではないか。ドローイング、版画とも「見立てる」ことで新たに見えてくるものに興味を持って制作しています。

■上田　勇一
詩人は感性を言葉に写しとり、画家は言葉にならない想いを写しとります。
ささやかな物の中に、美しさを感じ感動できる自分でいるために描くことを課しています。
何となく最近、無数の線の蓄積は私の生命といって良いところまで来ている、と思うようになりました。
その生命の中に、太古から連綿と受け継がれてきたものの凝縮は、今この瞬間の為にあるのだから…、と思う。
今日も怠けずに描こう。
そして、今日も太陽が昇ったことに感謝して。

■香川　久士
目に映るものをカメラで捉えて写真で表現する。そのため写真には、具象性・現実性などが必ず付き纏ってくる。そのような固定観念に従っていては写真表現の可能性を自ら閉ざしてしまっている。「写真の抽象化」そこが私の目指すものとなりました。
これらの「岩」の作品群は特別な岩を撮ったものではありません。誰の目にも留まることもないようなものです。そのような「岩」が集まって作り出される雰囲気がこの作品となっています。

■近藤　英樹
ふとたちあがるいのちの気配
足をとめる

■真鍋　武
初めから《モノ》を描かない《ドローイング》。しかし、漠とした《線》はイメージが交錯し、枚数を重ねるごとに植物的な感覚世界にも埋没していく。この感覚は外界と内界を繋ぐ日常の《自然＝生活＝時間》という観念に支配されている。だからこのドローイングには自然に関わる事象のイメージとしてのかたちも多く現れる。また、そこから派生した立体物は、既にここに在る《かたち》として、ドローイングと共に空間を取り込む装置となる。

■三野　計
山間地に生まれ育った私にとって、42 年前、東京に出た時は、その時代の流れの速さにショックを受けた。10 年以上のひらきを感じた。ここ 30 年余り松山に住んでいて、時に山に帰ると、その流れの違いはあまり感じないけれど、同時に一方では、自然の変化に失望してしまう。自然の音、匂い、輝き、自分の中に残るそれが、42 年前のコンプレックスとは違って、誇りに今は思えてくる。しかし、それは記憶の中でしかなくなってきている。生きてる自然をいつまでも感じていたいと思う。しかしながら、その思いは、今では祈る形でしか表現できないことがとても悲しい。

■村上　保
僕はここ十年余り、羽化というタイトルのシリーズ作品を制作してきた。公園で遭遇した蝉の羽化と、その脱け殻からヒントを得たものである。思えばこのシリーズ以前も、蝸牛、兜、柩、風船、笛など、中が空洞の形をモチーフにしてきた。空っぽの空間、羽と胴体とのわずかな隙間、いわば実在しない形に“かたち”を与えようと試みてきたわけである。そのことに気付いたのは柩の作品を制作し始めた頃で、それからそれが作品に共通するテーマになっている。

■山本　修司
15 年ほど前より三つの素材を中心に制作を続けております。（木、石、硝子）
日常の中にある自然を、自分のフィルターを通して新たな感覚を目覚めさせる事ができたらと思っています。近作は、木と光を主材にして展開しておりますが、地球と太陽の間に出来た、薄くて貴重な現象をイメージしながら制作しています。
今、生きていて感じる問題と、向き合いながら生まれてくる表現を見ていただければと思います。

作品リスト

■石山直司

BURNING SNOW	2007	エッチング、アクアチント/紙	93.0×65.0cm
SELF-RELIANCE	2007	エッチング、アクアチント/紙	65.0×95.0cm
SOMETHING	2007	エッチング、アクアチント/紙	33.0×20.0cm
GRAIN’07-Ⅰ	2007	エッチング、アクアチント/紙	5.0×5.0cm
GRAIN’07-Ⅱ	2007	エッチング、アクアチント/紙	5.0×5.0cm
GRAIN’07-Ⅲ	2007	エッチング、アクアチント/紙	5.0×5.0cm
GRAIN’07-Ⅳ	2007	エッチング、アクアチント/紙	5.0×5.0cm
PERCEPTION IN THE MIRROR	2008	エッチング、アクアチント/紙	62.0×84.0cm
ENSHRINE	2008	エッチング、アクアチント/紙	65.0×29.5cm
“POND” as “EYE”	2008	エッチング、鉛筆/紙	65.0×92.0cm
“ROCKY MOUNTAIN” as “WOMAN’S HEAD”	2009	鉛筆/紙	110.0×75.0cm
“TOWER　HEAD” as “WHITE CLOVER FLOWER”	2009	鉛筆/紙	110.0×75.0cm

■上田　勇一

Daybreak	2001	シルバーポイント／板	91.0×72.8cm
Sonnet	2003	シルバーポイント／板	45.5×37.9cm
水盤の音	2003	シルバーポイント／板	41.0×24.2cm
しのぱしの宴	2003	シルバーポイント／板	33.4×53.0cm
楽想	2003	シルバーポイント／板	91.0×116.7cm
白猿（inviting the good of the wind）	2004	シルバーポイント／板	91.0×72.8cm
タビダチ	2006	シルバーポイント、カゼインテンペラ、箔／板	直径58.0cm
風の思い出	2006	シルバーポイント／板	50.0×72.7
遠い記憶	2007	シルバーポイント／板	72.8×30.1cm
ドライフラワー	2007	鉛筆、水彩／紙	34.0×17.8cm
white fog	2008	シルバーポイント／板	直径43.0cm
ドライフラワー	2008	シルバーポイント／板	72.8×30.0cm

■香川久士

Wheel	2002	ブロムオイルプリント	24×20inch
Edge of Darkness	2002	ブロムオイルプリント	24×20inch
Sun Spot	2002	ブロムオイルプリント	24×20inch
ROCK #1	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #2	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #5	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #6	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #7	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #9	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #10	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #14	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #15	2003	シルバープリント	24×20inch
ROCK #18	2003	シルバープリント	24×20inch

■近藤英樹

dream of tadpoles	2007	リトグラフ/紙	29.0×29.0cm
face of water	2007	リトグラフ/紙	29.0×29.0cm
flowers from the sea	2007	リトグラフ/紙	29.5×29.5cm
dream of tadpoles	2008	リトグラフ/紙	29.5×29.5cm
blooming	2008	リトグラフ/紙	29.5×29.5cm
rain	2009	リトグラフ/紙	38.5×51.5cm
fungi	2009	リトグラフ/紙	38.5×51.5cm
あぶく	2009	リトグラフ/紙	38.5×51.5cm
sprout	2008	リトグラフ/紙	29.5×29.5cm
pollen	2009	リトグラフ/紙	38.5×51.5cm
ほとり	2009	リトグラフ/紙	38.5×51.5cm
sprout	2009	リトグラフ/紙	38.5×51.5cm
発芽／再生の種	2009	アクリル絵具/木	
blooming	2010	リトグラフ/紙	69.0×92.0cm
ホウシ	2010	リトグラフ/紙	69.0×92.0cm
発芽／再生の種	2010	アクリル絵具/木	

■真鍋　武

連鎖ーそこにあるものー	2007-2010	ドローイング：鉛筆・インク・墨・水彩・アクリル絵具/ファイルホルダー紙、立体：鉄
枯れ植物	1992-2010	植物（茨城県・千葉県・愛媛県・フランス・アメリカで採取）

■三野　計

ブルータス　お前もか！　ー移変ー	1月22日（金）～1月28日（木）
浄化	1月29日（金）～2月 4日（木）
保護	2月 5日（金）～2月11日（木）
逆流	2月12日（金）～2月18日（木）
虹がかかる	2月19日（金）～2月28日（日）

■村上　保

脚（あし）付きの柩Ⅲ	1989	乾漆	H80×W72×D165cm
風を聴く装置ーBOXー	1997	乾漆	H50×W85×D195cm
風の船Ⅳ	1999	乾漆	H115×W110×D135cm
降りた天蛾	2004	乾漆	H125×W135×D115cm
羽化ー飛龍空想ー	2008	乾漆	H155×W180×D60cm
羽化ー蜻蛉ー	2009	コールテン鋼	H34×W52×D18cm

■山本修司

ちりよる（leaf）’05	2005	ラッカー・トナー／板	180.0×75.0cm
ランドスケープ川’08（コペルニクス メトロノーム）	2008	石・砂・アクリル絵具／板	180.0×90.0cm
ランドスケープ川’08（calm river）	2008	石・砂・アクリル絵具／板	90.0×180.0cm
木漏れ日’09	2009	アクリル絵具／綿布	12点組：各90.0×90.0cm
木漏れ日’09	2009	アクリル絵具／綿布	260.0×194.0cm
木跡’09	2009	小石・砂・枝・アクリル絵具／木ステージ	180.0×180.0×45.0cm
ちりよる’09	2009	ラッカー・トナー／MDF	9点組：各75.0×51.5cm